

# 令和3年度 小平市立小平第十三小学校 学校評価報告書

**学校教育目標** 生きて働く知識技能の習得と未知の状況でも対応できる思考力・判断力・表現力の育成、学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養を目指し、次のとおり教育目標を設定する。  
 ◎ 自ら考え行動する子ども(重点目標) ・ 仲良く助け合う子ども ・ 明るく元気な子ども

**目指す学校像(ビジョン)**  
**【目指す学校像】** ○人権感覚をもち、一人一人の子どもを大切にす学校 ○子どもが主体的に考え、活動できる生き生きとした学校  
**【目指す児童・生徒像】** ○自ら考え、積極的に行動する子 ○明るく健康で、人間性豊かな子  
**【目指す教員像】** ○常に学び合い、よりよい授業を目指す教師 ○居心地のよい学級・学校づくりに取り組む教師 ○地域連携に励む教師

**前年度までの学校経営上の成果と課題**  
**【成果】**教職員が丸となって「健全育成」と「児童理解」に取り組んできたことにより、児童にとって居心地のよい学級・学校を実現できた。  
**【課題】**基礎的・基本的な学力の定着及び、知識や技能を活用し、工夫して課題解決を行う学力の育成を更にすすめることが必要である。

	具体的方策	第1回評価		成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価	成果・課題・次年度以降の対策
		取組指標	成果指標		取組指標	成果指標		
学力の向上	①ホワイトボードの活用 ②授業アンケートの実施 ③「はい、立つ、です」の徹底 ④英語科授業の充実と小・中連携 ⑤ICT教育機器の拡充と活用 ⑥学習補助員の活用と個別指導 ⑦東京ベーシックドリルの活用	3	3	・全学級にホワイトボードを設置し、授業の流れを提示したことで、児童が学習の進行の見通しをもてるようになり、安心して学習に取り組むことができるようになった。 ・「はい、たつ、です」の授業規律について、ポスターを作成して各教室に掲示するとともに、時に応じて学級での指導を行ったことで、児童への定着が見られた。 ・ICT機器の活用は、職員研修を行いながら進めることができた。	3	3	・一人一台の学習者用端末の配布は、学習の行い方の選択肢を増やすとともに、多様な学習スタイルの可能性を感じさせる。 ・児童の個性が多様化しており、担任の先生が一人に対応するのは大変なので、学習補助員の配置は有効だし、ボランティア等を活用して個別指導も進めた。	・毎週金曜日の朝学習の時間に、帯で東京ベーシックドリルに取り組むことで、学習の方法が身に付き、基礎学力の向上に繋がった。 ・ホワイトボードの活用については、学年によっては活用が不十分な学級があったので、次年度は全学級での徹底を図る。 ・学習者用端末の活用については、今年度1年間は模索状態だったので、教職員で共通理解を図りながら、足並みをそろえて進めるようにする。 ・英語科授業の小・中交流は、コロナ対策の影響で計画どおりに実行することができなかったため、来年度は工夫して計画に位置付ける。
健全育成(いじめ防止)	①挨拶運動の実施 ②いじめ防止校内委員会の充実 ③セーフティ教室の実施 ④生活のきまりの見直しと順守 ⑤交通安全教室の実施 ⑥特別支援学校との交流会 ⑦クラブ・委員会活動の充実	3	3	・年間3回の「あいさつ運動」を代表委員会の児童を中心に進めることができた。 ・土曜学校公開日を利用して、保護者とともにSNSや情報の活用のしかたについての講演会を実施し、啓発することができた。 ・近隣の特別支援学校との交流会は、コロナ禍を鑑み、実施を見合わせた。	3	4	・保護者や地域の方々、学校に本校したお客さん等には元気にあいさつができるようになってほしい。「あいさつ運動」等の取組はどんどん行おう。 ・特別支援学校との交流やゲストティーチャーを招いての授業等を積極的に行って、子どもたちには様々な体験を積んでほしい。	・生活のきまり「十三小の約束」を年度初めと2学期末に学級指導することによって意識付けを図り、定着することができた。 ・保護者・地域アンケートの「学校はいきいきと活動する場になっている」の項目では、肯定的な回答が96%と高い評価が得られた。今後も学校と児童・家庭との良好な関係をさらに築いていきたい。
特別支援教育	①教室前面の掲示物の配慮 ②特別支援教室の効果的運営 ③児童一人一人の正確な見取り ④特別支援巡回指導の活用 ⑤個別指導計画の作成と活用 ⑥特別支援教育校内委員会の充実 ⑦こげら支援シートの活用	3	3	・教室前黒板左右の掲示板に貼る掲示物を制限することで、児童が学習に集中することができた。 ・特別支援教室の指導教員との連携を密にとり、一人一人の児童に対するきめ細かい指導を行うことができた。また、定期的な巡回指導により指導の妥当性を振り返り授業改善に役立った。 ・保護者の同意のもとに個別指導計画を作成したことにより、目標に基づいた指導を共通理解のもとに進めることができた。	3	3	・小学校入学に不安を抱える児童や保護者に「こげら支援シート」を提出してもらうことは、学校と保護者が連携して子どもを育てることにつながっている。 ・一人一人の正確な見取りに基づいたきめ細かい指導は、特別な支援を必要としている児童の成長に貢献している。	・特別支援教室との連携や巡回指導の活用については児童の指導に一定の成果が得られたが、更に「これだけなら」に基づいて、特別支援教育的な視点に立った指導により学級・学年経営を行うようにする。 ・毎月の校内委員会では、関係職員で指導の方向性を共通理解し、指導に当たることができた。また、新たに複数名の児童を特別支援教室の入級に導くことができた。
体力の向上	①感染症対策の理解と実践 ②なわとび技能の向上 ③マラソンへの取組強化 ④ラジオ体操の交流会 ⑤楽しみながら運動プログラム ⑥基本的な生活習慣の確立 ⑦体力向上月間の計画と実施	3	3	・市のガイドラインに基づいた新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で、体育の学習や取組などを実践することができた。 ・なわとび週間及びマラソン旬間を設け、学級・学年ごとに取り組むことにより、体力の向上を図った。 ・「早起き、早寝、朝ごはん」を合言葉に、学級指導や家庭への啓発を行い、基本的な生活習慣の確立に努めた。	3	3	・「裸足の運動会」が今年度は実施できてよかった。 ・「なわとび週間」や「マラソン旬間」などの体力向上の取組は、コロナ禍によって縮小して実施せざるを得なかったことは残念である。 ・ラジオ体操の交流会や体力向上月間などは、コロナ禍においても小・中が連携して工夫して行うことができることよい。	・新型コロナウイルス感染症の感染対策が定着してきた。今後は変異株の特徴等を考慮しながら対応を強化していきたい。 ・小平第二中学校と連携した「ラジオ体操交流会」は、コロナ禍により実施することができなかったため、来年度以降実施する。 ・なわとびやマラソンの取組は、縮小した形ではあったが実施できた。今後はコロナ対策を工夫して行う方法を考えていく。
ライフ・ワーク・ワーク	○自己申告の面接や勤務時間調査を活用した、ライフ・ワーク・バランスへの意識向上。	3	3	・年度初めに作成する各教員の「自己申告書」にライフ・ワーク・バランスの取組に関する記述をすることで、働き方改革や業務の改善に対する意識を高めることができた。 ・スクール・サポート・スタッフの配置は、各教職員の業務の軽減に大きく寄与し、残業時間削減に役立った。	3	4	・スクール・サポート・スタッフの導入は、教職員の働き方改革に対して、大きな成果があがったと言えるのではないだろうか。 ・教職員が自分なりに退勤時間を意識して働いていると伺っている。成果は出ていると考える。	・各教員が「自己申告書」に目標を記載したことにより、ワーク・ライフ・バランスに対する意識化が図られ、行動に現れた結果となった。 ・職員室の勤務環境を改善し、働きやすい雰囲気を作ることので、気持ちよく働くことができ、業務の能率向上になった。